

# 法の水菱

大正大学講師 高橋秀城

(45)

柴の庵に

とくとく梅の  
匂ひ来て  
優しき方も  
ある住処かな

(西行「山家集」)  
(柴ぶきの相末な家に、  
誇り高い梅の香りが漂っ  
てくる。優雅な住まいで  
あるよ)  
心地良い東風に乗って、

いよいよ本格的な春が近  
づいてきました。陰暦三  
月の異名「弥生」は、野  
山の草木がいよいよ生い  
茂る様子を表す「弥生」  
から転じたものと言われ  
ています。春の息吹に急  
かされるように、冬籠り  
をしていた動物たちも目  
を覚まします。  
三月も平ばを過ぎれば、



桜咲く春は「出会いと別れの季節」(撮影・高岡輝幸氏)

少しづつ桜の便りも聞こ  
えるでしょう。音もなく  
降る春雨を眺めながら、  
今か今かと桜の開花を待  
ちわびます。  
春は「出会いと別れの  
季節」とも言われます。  
「春風駘蕩」という成句  
のように、いつも長閑に  
何事もなく穏やかに過ご  
したいと願っても、目ま  
ぐるしい変化を前にして  
いつしか心はそわそわと  
落ち着かなくなるもので  
す。喜びと悲しみが交互  
に巡り来る季節なのかも  
しれません。

花散らす  
風の宿りは  
誰か知る  
我が教へよ  
行きて恨みむ

(古今集「素性」)

(桜を散らす風の住まい  
を誰か知っているだろう  
か。知っていたら教えて  
ほしい。「花を散らすな  
いで」と、行て恨み言  
を言いたいから)  
あれほど心待ちにして  
いた春の風も、見事な満  
開の桜の前では、つい恨

(鴨長明「菟心集」)

場所が知られたと思ひ、  
また去つて行かれたのだ  
らうと思ひ巡らすのでし  
た。  
僧侶として出家し、こ  
の世を避け離れることを  
「厭う」と言います。玄  
寶僧は「安心」を求めて、  
慌ただしく移ろい行く俗  
世間を遁れたのでしよう。  
世間を捨てるには、「世  
を捨て」「身を捨て」「心  
を捨てる」という三段階  
があると云います。

(無住「沙石集」)

玄寶は、清らかな川辺  
で身を淨め、自然を感じ  
ながら心を研ぎ澄ませて  
いました。それはまさに、  
名譽などの執着を離れた  
「心を捨てた修行」であ  
ったことが想像されます。  
「厭う」と似た言葉に  
「嫌う」があります。「嫌  
う」が「相手を積極的  
に切り捨てる」のに対して  
「厭う」には「相手を避  
けて身を引く」という意  
味合いがあります。玄寶  
は、この世を完全に「嫌  
う」ことなく、船頭とし

まれてしまうようです。  
「恨む」の語源は「心見  
る」で、相手の「心の裏」  
を知りたいという不安な  
気持ちが進められていま  
す。人間は、同じ相手によ  
あつても、その時々によ  
つて、満ち足りたり、不  
満に思ったり…：：：なかな  
か心安まる時がありません。  
どのようでしたら  
心の平安が得られるので  
しょう。  
平安時代の初め頃、玄  
寶という人がいました。  
奈良のお寺の徳の高い僧  
侶でしたが、この世(俗  
世)を離れたいという思  
いが深く、他の僧侶との  
付き合いも好みませんで  
した。三輪川のほとりに  
小さな草庵を作って、人  
目を避けるように生活し  
ていました。  
高僧の誉れが高かつた  
ため、天皇が招き迎えよ  
うとしましたが、玄寶僧  
はそれを断り、誰にも  
知られないように姿を消  
してしまいます。弟子た  
ちは行方を探しますが、  
見つめることができません

ん。世間の人々は嘆き悲  
しみました。  
その後数年を経て、弟  
子の一人が北陸へ旅して  
いた道中のこと。ある所  
に大きな川がありました。  
渡し舟を待つて乗り込ん  
だところ、その渡し(船  
頭)は、髪が伸びて、汚  
らしい麻の衣を着た法師  
でした。「みすぼらしい  
男だな」と見ていると、  
次第に師匠の玄寶僧の  
ように思えてきたのでし  
た。  
こうして帰りに、今  
一度その渡し場に行つて  
みると、既に別の船頭に  
変わっています。胸がふ  
さがり、詳細を尋ねてみ  
ると、「その法師は早し  
い身分に似合わず、常に  
心を澄まして、仏を念じ  
て、船賃を取ることもな  
く、物を貪る心もなかつ  
た。里人からも好かれて  
いたが、どういうわけか、  
先ごろ突然姿をくらまし  
てしまつたのだよ」と教  
えられます。悔しく、や  
るせなく思つたけれど、  
僧侶は、きっと自分の居

## 折り折りの記(79)

波多野 重雄

### 初場所や琴奨菊の初優勝

初場所の千秋楽に大関琴奨菊が初優勝を飾  
った。大関栃東以来、日本出身力士の優勝は  
十年ぶり。日本の国技相撲に名誉挽回の快挙  
といえよう。  
私は咄嗟に、「茶の「痩せ蛙負けるな一茶ここ  
にあり」の句を思ふ。大関は九州柳川の出身で  
あり歌人白秋と同郷である。白秋は八王子市  
歌「黎明響高く桑の都」を作詞、高尾山に自  
筆の歌碑「我が精進こもる高尾は夏雲の下谷  
うづみ波となづさふ」がある。今回の「横綱  
をそうなめにして勝つ角力」の奮起に喝采。  
(高尾山健康登山の会々長)

## 明美吟

厚木市 荒井 一雄

### 歌妃友納明美姫

### 眉目秀麗如月星

### 三千世界不二女

### 三千男子抱恋心

ゆく春を  
惜しみ散るらん 花あれど  
姫の微笑み いま眞つ盛り

明美(あけみ)吟

歌の妃、友納あけみ姫…  
眉目秀麗(容貌優れ美しき)  
月・星の如し…  
三千世界(広き世界)に、  
不二(一人と無き)の女…  
三千男子(無数の男性)、  
恋心を抱く…

## 前貫首・山本秀順大和尚御命日

て身をやつしながら、  
人々との交わりを続けて  
いました。これは、高僧  
としてまつりあげられる  
ことを避け、一人の人間  
として、あらためて今生  
きている世界を見つめ直  
したかったからではない  
でしょうか。  
慈眼等しく見れば、  
怨憎会の苦もなし。  
(「菜花物語」)  
(慈愛に満ちた優しい眼  
で平等に見れば、怨み憎  
むものに会う苦しみもな

い)  
物事の橋渡しをするこ  
とを「津梁」と言い、仏  
教では「人々を救つて幸  
せに導く」という意味に  
なります。「船頭」をし  
ながら玄寶は、幸せの向  
こう岸に人々を「先導」  
していたのかも知れませ  
ん。小舟がたゆたう春の  
川辺には、きつと芳しい  
色とりどりの花が咲き乱  
れていたことでしょう。  
(栃木北部教区普濟寺中)



二月四日は、前貫首・  
山本秀順大和尚の御命日  
であります。大山御貫首  
は歴代先師墓地において、  
懇ろに御回向を致しまし  
た。  
大和尚は平成八年二月  
四日、世寿八十四歳にて  
御遷化されました。  
柔らかな日差しに近づ  
く春の気配を感じ、亡き  
大和尚の御冥福を祈り、  
墓前に香を手向けました。